

はせさんず

2013 秋号 NO.63

ニュース

2013年9月20日(金)発行
NPO法人たすけあい大田はせさんず
理事長 佐藤 悟
〒146-0082 東京都大田区池上4-28-3
はせさんず(会員制) 03-5747-2610
ヘルパーステーション 03-5747-2816
ケアサポート 03-5747-2800
デイホーム 03-5747-2660
元気かい 03-5747-2605
FAX専用 03-5747-2620

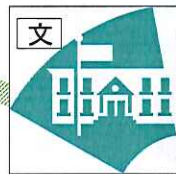
家庭と学校をつなぐ移動支援 地域での連携をめざして

■矢口特別支援学校

大田区では、知的障害のある小学生、中学生、高校生の多くが、東京都立矢口特別支援学校に通っています。学校は東急多摩川線武蔵新田駅から5分。小・中学生はスクールバスもありませんが、バス停と自宅のあいだは家族やヘルパーが付き添います。

■通学・通所の支援

高校1年生のA君は、毎朝7時45分に、はせさんずのヘルパーが自宅を訪問し、学校まで歩いて送ります。交差点を安全に渡れるか、興味を引かれたコンビニへ入ってしまったかなど、ヘルパーが見守ります。



移動支援サービス

はせさんずヘルパーステーションは、2006年(平成18年)から大田区と移動支援事業の協定を結び、居宅介護と併せて活動を続けています。移動支援とは、障害のため屋外での移動が困難な人に対してヘルパーが実施する外出時のサービスです。障害のある人が地域で自立生活を続け、社会参加をするために、ヘルパーの支援が必要と認められた時間数について、大田区から移動支援サービス費が支給されます。



午後3時ごろにはバス停で、ヘルパーがスクールバスの到着を待ちます。学校帰りの小学生をバス停から自宅まで送るためです。歩いて帰る子、電車に乗って帰る子、それぞれ保護者の要望に合わせてヘルパーが付き添います。

■移動支援のヘルパー

はせさんずヘルパーステーションの移動支援を利用して約20人が小・中学、高校生。ヘルパーは約30人。はせさんずではヘルパーの手が足りなくなると、事務局スタッフや佐藤理事長まで駆り出されて(もちろんヘルパー資格も支援経験もありません)サービス最優先で活動します。

■学童保育所

学校帰りの子を、学童保育所(学童保育クラブ)へ送る場合もあります。はせさんずから『かたつむりクラブ』『ゆめクラブ』へは歩いて5分程度。夕方の5時近くになるとヘルパーが「サービスに行つてきます」と出発。学童保育所から自宅まで利用者を送る移動支援です。家庭から学校へ、学校から学童保育所へ、学童保育所から家庭へと、移動支援サービスがつかないでいきます。

■休日の移動支援

日曜日や夏休みは、体操教室、映画、ショッピング、プールなど、普段はできない長時間



はせさんずのヘルパーと中学生が、『ゆめクラブ』へ向かっています

間の外出を試すチャンス。いつもいっしょの家族とは違うヘルパーと過ごす時間は、子どもたちにとって大切な社会参加の経験となります。

■保護者との情報交換

ヘルパーは、移動支援のサービス中、危険を防ぐため常に注意を払うのは当然ですが、利用者の好きなこと嫌いなことを知りひとりひとりの障害に合わせて話しかけるなど、利用者と一緒に楽しく過ごすことができるように配慮します。そのためには保護者とヘルパーが常に情報交換していくことが大事です。



■地域連携

特別支援学校の先生との情報共有も重要です。特別支援学校では児童生徒のひとりひとりに、学校での年間目標や保護者も持っている将来への希望などについて「個別の教育支援計画」を作成しています。



はせさんずのヘルパーが『かたつむりクラブ』から自宅へ小学生を送ります

す。これを開示してもらえ保護者を増やしていきたい。移動支援ヘルパーや学童保育所など地域の事業所が共有し、同じ方向を見ながら支援ができれば、障害のある子どもたちがいつまでも、地域で豊かな自立生活を送れるように願っています。

学童保育クラブ

小学生対象の『かたつむりクラブ』(池上3・31・14)と中学・高校生が対象の『ゆめクラブ』(池上6・13・11)は、はせさんずのご近所です。障害のある子どもたちが、放課後や学校の休校日を楽しみやすくすることができるよう、保護者が主体になって設立し、現在は『NPO法人じゃんぷ』が運営する通所施設。



『かたつむりクラブ』正面

「日常のかかわりや体験を通じ地域の中で仲間づくりを行う」「親子ともに成長していくことをめざして」活動しているそうです。プログラムは、公園遊び、おやつ作り、買物活動、リズム活動などを、曜日ごとに内容を変えて実施します。

要支援1・2の切捨て!

社会保障と税の一体改革として設立された社会保障制度改革国民会議の提案を受け、厚生労働省は要支援1・2を介護保険制度の保険給付からはずすことを社会保障審議会介護保険部会で発表しました。市町村が中心となる地域支援事業において生活支援サービスを充実させる、担い手として地域住民を活用し、さらに高齢者の社会参加を推進することが狙いとありますが、換言すれば、NPOやボランティアを活用すれば、コストカットできるという発想でしょう。もちろん現在の一割負担をいくらにするかも市町村次第。大田区次第で負担増となるかもしれません。どのようなサービスも、質が高く、心のこもったサービスを提供できるのか、議論すべき点は数多くあります。

2020年東京五輪がIOCで決定したというニュースもありました。これからの勝負です。誘致が成功した要因の一つは、東北震災復興への期待もあったのでしよう。さわやか福祉財団による支援の一員として石巻市雄勝地区の復興支援をしています。被災者の移転先が決まりつつあり、福祉のまちづくりに一歩進む段階です。そのために住民と行政とがタイムリーにしかも一方通行にならない情報のキャッチボールができるようこれからも後方支援していきたいと思えます。(佐藤)

ヘルパー研修会で調理実習

ヘルパーステーションで6月20日(木)に実施した研修会のテーマは「みんなのアイデアで、おいしく楽しく料理を提供しよう」です。

大田地域活動栄養士会から、成田幸恵先生他2名を講師に迎え、高齢者の「食」についての重要性や限られた時間・食材でいかに効率よく、おいしく調理できるか等を勉強しました。参加者16名。



日頃のサービスを振り返るよい機会となります。今後にもよりよいサービス提供のために研修機会をつくっていきます。

講義では、高齢者の「食」の重要性、調理時に配慮すべきこと、高齢者の一日に摂るべき食品の目安等、大変参考になるお話を聞くことができました。

グループに分かれて行った調理実習では同じ食材にもかかわらず、和洋中さまざまなジャンルの料理ができました。どれも見事なできばえ。その後の試食では、お互いに感想を述べ合っていました。

「食」は誰にとっても楽しく、とても大切なものがあり、まして利用者へ提供している私たちには、より重要なテーマです。最初の

日頃のサービスを振り返るよい機会となります。今後にもよりよいサービス提供のために研修機会をつくっていきます。

移送サービス活動日誌

宮 輝彦

はせさんず福祉有償運送(移送サービス)に参加してから早くも1年半経過。私は59歳で勤務先を早期退職し、車での旅を続け、その後60歳間近で移送サービスに参加しました。

サービスでは、責任者の大沢さんをはじめ多くの先輩、利用者等の指導のなか、最近徐々に慣れてきたように感じ始めています。しかし、この「慣れた」という思いが危険。いつも始めた当初の緊張感を忘れず細心の注意をもって続けな

ればとも思っています。移送サービス参加を前にホームヘルパーの講習を受け、介護知識・技術・心構えを勉強しました。この講習で経験した介護に取り組む人々の生き方に共感し、感謝の気持ちを持てたいと思っています。

次号から「ヘルパー日誌」が始まります



NPO活動団体交流会

NPO活動団体と大田区

議会議員との懇談会が8月10日(土)に消費者生活センターで開催された。今年は大田NPO活動団体とおた



区民活動団体連絡会の共催で両会からテーマを一題ずつ提案し懇談。交流会から「子育ては社会全体で支援する」、連絡会から「防災計画を具体的に進めるために」を説明し、議員と参加団体で今後の方向性を話し合った。懇談会も今年で10年になるが近年、議員もNPOにかなり理解を示してくるようになったと感じる。出席議員は自民党2名、公明党4名、共産党3名、生活者ネット1名、民主党1名。NPO・区民団体側の出席は20団体であった。

敬老会で出前講座

9月8日(日)、敬老会

(池上清寿会・会長宮嶋利明さん)で講演会を開いた。8年ほど前に前理事長坂口さんが「意地悪ばあさん」というテーマで話したが、今回は「成年後見制度」。介護保険と成年後見制度の関係、任意後見・法定後見制度、市民後見人の必要性等について話をした。固い話ではありましたが、熱心に聴講してもらったので、これからの自分の生き方の参考になったと期待したい。参加者24名。(佐藤)



入新宿会館にて

事務局たより

■人事

助川純子さんが4月1日付でヘルパーステーションのサービス提供責任者として、岡田香さんが6月1日付でデイホームの生活相談員として、須之内八千代さんが8月1日付で非常勤調理員としてはいりました。



25年度第1回大田区福祉有償運送運営協議会開催
8月30日(金)、大田区役所にて開催。大田区では1団体が撤退し、はせさんずとばんぶぎんの2団体のみが活動中。運送回数は平成23年6327回から平成24年6140回と減少。福祉有償運送の制度の趣旨が、まだ区民に行き渡っていないので情報整理が必要との行政の課題も指摘された。

はせさんず各部門スタッフより 聞いて！ 聴いて！

会員制たすけあい活動
外国人旅行者にわかる道路標識の英語表記が進められている。国会を「Kokkai」から「The National Diet」に改めた。たすけあい活動においても、相手にわかる言葉を使うことの重要性を感じる。活動者として利用者にはもちろん、効率的な家事援助や安全な移送サービスをするだけでなく、そのなかでの楽しい会話も重視したい。潤いある生活支援をこれからも継続していきたい。(佐藤悟)

ヘルパーステーション
日々の利用者の状態把握はヘルパーの役割。ヘルパーからの報告がケアマネを経て医療に連携されることで利用者の生命にかかわることも少なくない。一方、認知症の増加で本人のみならず家族の心の内面、思いにも寄り添い、ときには物盗られ妄想等にも共感できる態度が必要です。そんな多様な役割を担うヘルパーが悩みを抱え込まないように、サ責として常に情報共有しやすい雰囲気づくりを心がけたい。(鈴木敦子)

ケアサポート
昨年度に引き続き、さわやかサポート徳持の声かけで、地域の介護保険事業所とともに見守りネットワークづくりに参加しています。地域での孤独死をなくし、ケアの必要な人が安心して声をあげられる、そんな街づくりをめざしています。今年度は民生委員の積極的な参加もあり、少しずつ形が見えてきました。ひとりひとりの持てる能力を生かして地域のために貢献できる、素敵なことだと思いませんか？(牧野晴美)

デイホーム
デイホームの今期の目標は「チームワークの強化」です。チームワークに欠かせないのがコミュニケーション。ということで、介護職員が中心となって日々の業務について気軽に話し合える介護会議を月1~2回程度実施しています。先月末に4回目の会議を行いました。すでに一部業務改善に反映されているケースも出ています。いずれはデイホームの運営方針を職員全体で話し合えるチームにしたいと思います。(新留信弘)

元気かい
妻が64歳で倒れ集中治療室で介護もできぬまま1週間後に急逝。今もなお悔やまれてならない。供養のつもりで「はせさんず」に駆け込んだが介護の世界は初めて。まず現場で1年活動し、元気な高齢者が自分の人生は終わりと閉じこもりになっている実態を見て「元気かい」に取り組んだ。人と人とのふれあいを大事に高齢者の活性化に努め、今日に至った。尽力してくれる世話人諸氏に深甚の謝意を表したい。(中谷三郎)